

令和7年度 お茶の水女子大学 文教育学部
学校推薦型選抜 高大連携特別選抜 試験問題
人文科学科(地理環境学プログラム)

次の文章を読み、問一と問二に答えなさい。

地理学の基本的な研究テーマの一つに、「自然と社会の関係」がある。地理学が、「自然と社会の関係」をどのように研究してきたかを論じるとともに、現在の地理学でその関係をどのように捉えているかを考察する。

19世紀後半の近代地理学では、大学でのほかの学問との分業の中で、いかにして地理学の存在が認められるかが大きな課題であった。たとえば、イギリスの地理学者ハルフォード・ジョン・マッキンダーは、1887年1月31日（月曜日）の夜に、ロンドンの王立地理学協会で「地理学の研究範囲と方法について」を講演した。地理学は、大学の学問の中で“最大の空白部分の一つである自然科学と人文研究の隔たりに、橋渡しをすることができる”として、“社会における人間とその環境との相互作用を究明する科学”として、地理学を定義した（Castree, 2011, p.288）。同じような考えは、アメリカの地形学者デービス、フランスのブラーシュ、ドイツのラッツェルなど同時代を代表する地理学者ももっていた。

この考えは、自然と社会を一つの概念的傘下に保持する試みであり、「地理的実験」とよばれ、二つの側面が存在する。第一は、自然を一組の個別な部分としてではなく、全体として研究することである。化学、物理学、生物学などの学問は、自然界の要素を選択し研究するのに対し、地理学はそれらすべての要素を組み合わせることで研究するのである。言い換えると、自然をひとつの統合された多面的体系として研究する。第二は、自然と人間社会を二方向の関係から研究することである。研究される自然は、経済、文化、政治の人間活動の基盤を形成するとともに、それらによって影響を受けると捉える。

たとえば、フランスの地理学者ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュは、場所が人間と社会の各種要素の集合によって成立するのではなく、「地的統一」という用語を用いて、全体としての統一作用により成立していると考えた。“自然の諸現象はすべて給合の形であられるものである。…樹木・下生え植物・菌類およびこれらに密接に結びついて生活する昆虫・白蟻・蛾などの諸生物が共棲している森林とか、岩の裂け目にたまった塵をめぐって生活する苔・草木・昆虫などの…諸生物は同一の空間に適応して「共通の制服」を着る様になる。地的統一はこうして諸現象の関連によって成立するのである”（松田, 1959, p.428）。

図 7-1 は、自然界を構成する要素の「^{ジ・グラフィカル・アソシエーション}地理的 関 連」を表している。自然地理学では、自然を、地形、水文、生物、気候に分ける。これらの要素は、地形の上に水文、水文の上に生物というように、層状に重なり合って、地域の自然を構成する。要素間には垂直方向に関連性が生まれる。たとえば、寒帯のツンドラのように気候が地形に影響するとか、汽水湖のシジミのように水文が生物に影響するとかである。このように地域を構成する要素間の「垂直的関連」を、地理的関連とよぶ。要素間で地理的関連が発生する理由は、それらの要素が同

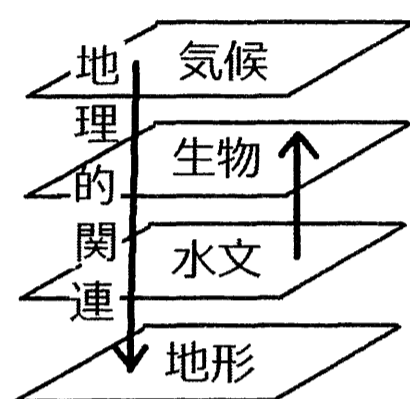


図 7-1 自然界の要素の地理的関連

じ地域に存在しているという「^{コエグジスタンス}共存性」のためである。地理的関連は、自然だけでなく、社会の要素間でも（高阪，2008，109-110），また，自然と社会の間でも発生する。

このように近代地理学は、自然と社会を学問的に橋渡しするという大きな野心をもっていた。しかし、この大望を満足のいく形で実現することは、当時は難

しかった。問題は、実行可能性にあった。自然の構成要素間の因果関係を論証することは、非常に難しいということがわかり、研究はあまり進展しなかった。自然の要素とさまざまな社会間の因果関係の論証がさらに難しいことは、言うまでもない。異なった社会とそれらの自然環境の単なる記述を提供するだけで、まして納得のいく説明などできなかった。

たとえば、特定地域に焦点を当てたモノグラフは、その当時の標準的知識による印象に基づいたもので、自然と人間社会が与えられた状況の中で、いかに、そして、なぜそのように存在しているのかの問いに対し、十分に実証されていないような推測に基づいていた。最悪の場合は、これは、「^{ナチュラルディファレンス}自然の差異」に基づいた人種差別へと結びついた。たとえば、アメリカの地理学者サンプルやハンチントンは、ある自然環境が、ヨーロッパ人よりも知的、肉体的能力で劣る人種を生んだと論じる傾向があった。このような考え方は、「環境決定論」とよばれ、自然と人間社会の二方向の関係の中で、‘自然が人間社会を決定する’と論じたのである。

<環境決定論とは>

環境決定論は、19世紀の終わりから20世紀の初めまで、地理学において優勢であった一組の考え方である。環境（自然と気候）条件が、人間生活を決定したり、限定するとした。エレン・センプル、エルスワース・ハンチントン、グリフィス・テーラーなどが主張した。

このような「環境決定論」に対し、「社会構築主義」（第5章第3節を参照）はもう一方の端に位置する。自然は決して生まれたそのままではなく、生産され想像されると「社会構築主義」では考える。この考えに基づいた人文地理学では、自然界を、特定の時間と場所において、人間社会の命令によって形作られる対象物として取り扱う。そして最終的に、‘自然の終焉’に至るのである（マッキベン、1995）。

出典：高阪宏行 2024 『地理学の思考-位置，空間，場所，移動，自然と社会-』古今書院. 99-101.

問一 近代地理学は自然と社会の関係をどのように研究してきたのか、本文の内容に即して200字以内でまとめなさい。

問二 下線部を踏まえ、現代の地理学ではどのように自然と社会の関係を捉えうるか、あなたの意見を600字以内で自由に論じなさい。